

弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム

酒 井 龍 一

はじめに

本稿は弥生時代中期に近畿地方中央部に存した一社会構成体の構造を理解すべく、現時点の遺跡資料からそのセトルメントシステムを考古学的に分析し、全体で一つの仮説モデルとして提示することに目的がある。だが観察の対象とする遺跡のすべては極く部分的に発掘調査を受けているにとどまり、また論述にも未確定の諸要素を含み込む。それゆえ今後の発掘調査の進捗ならびに認識の展開と頻繁に対応させ、より現実に即した合理的なモデルに再構成する必要がある。

中期社会構成体の概要

近畿地方中央部、後日「畿内」と称される地に弥生時代中期の数百年間、一つの社会構成体が存していた可能性をかって認め（酒井一九七四・一九七六）、その後、実態究明の為の試行を幾度か続けてきた（酒井一九七七・一九七八A・一九八一・一九八二A・一

九八二B）。

それらを総合すると、この構成体は各地に点在する数十の拠点集落が生産―消費の相互活動による生産手段の一部共有体として安定した経済的・文化的・イデオロギー的複合体をなしていた。構成の基本要素である各拠点集落は、その多くが前期（第一様式）に設定され、中期初頭（第二様式）―中期末（第四様式）の長時間にわたり個定存続すると共に、この集落配列を回路に各地の諸生産物・人間・情報が広範囲かつ活発に移動した。このような状況は、それを相前後する時代が表面的にも社会構造の急激な変化を呈する状況とは対比されることになる。

ところで、この構成体は長時間にわたり全く動態のない静的状態にあったわけではない。各地の拠点集落による社会の基本的枠組は固定されつつも、それぞれから各小期に派生する下位周辺諸集落の活発な消長に顕著に反映するところにその動態の特質を認めることができる。このような拠点集落を核とする地域的動向は、例えば、安満（原口一九七七）・池上・四ッ池（堺市教育委員会一九八一）遺跡等その

周辺諸遺跡を含む調査が進行している地域でその一端を理解できる。ついでには各拠点集落遺跡内部の変化というミクロスケールおよび周辺諸遺跡の消長にかかるセミミクロスケールの観察こそ中期構成体の動態を把握するに不可欠の作業となるが、大社会全体の構造をマクロスケールで把握しようとする本稿とは機を改める。

かかる原理で構成される経済的・文化的複合体の枠組は、また広範な自然空間から自らを境界づけ存続せしむべく個有の祭祀イデオロギーをも生みだした。これは特定祭器を媒介とする観念型の祭祀段階のものであり、当時、近畿地方では主に銅鐸を、北九州では銅剣・鉾・戈という青銅製品を特定祭器とする同型態の祭祀が並存していた（春成一九七八、酒井一九七八B・一九八〇）。

構成体の形成・構造維持・解体過程の歴史的位置

歴史的には弥生時代前期（第一様式）が中期構成体の形成過程に、中期初頭（第二様式）～中期末（第四様式）がその構造維持過程に、そして後期（第五様式）がその解体過程にそれぞれ位置する。すなわち弥生時代前期を伝統的な縄文社会から新たな社会環境に適応した社会への変換過程、対する後期をより新たな環境に適応する次の古墳社会への再変換過程と理解する。

本稿の対象とする長時間の構造維持をみた中期社会構成体にはMa-

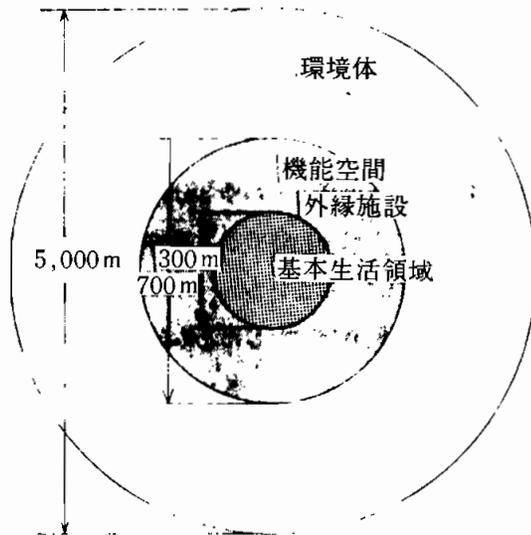
ryama (1963) による社会変動の規定を援用して、ネガティブフィードバック negative feed back の作用する「逸脱—抑制的相互因果過程 deviation—counteracting causal processes」つまりファーストサイバネティクス first cybernetics を該当させ理解すると共に、それが解体してゆく後期社会にはポジティブフィードバック positive feedback の作用する「逸脱—増幅的相互因果過程 deviation amplifying causal processes」つまりセカンドサイバネティクス second cybernetics を該当させ説明ができる（クンケル・加藤一九七四、バックレイ・新・中野一九八〇）。ただし、全体的にはネガティブフィードバックの作用する中期社会にあっても、部分的、例えば特定祭器を媒介とする祭祀イデオロギーにはポジティブフィードバックの働きが認められる。それは現像的には祭器の大型化・多数化および祭祀行為の頻発化・拡大化に表現されている。

中期構成体の解体が表面化し始めるのは後期初頭である。この時点から中期構成体の枠組を長時間にわたり形成してきた各拠点集落は徐々に廃絶を始め、後期末頃にはほとんどすべての廃絶が完了する。

この過程を生じせしめるイニシャルキック initial kick (Maruyama 1963) には大陸における急激な社会変動に起因するこの社会への外圧を評価し、弥生時代～古墳時代への社会構造の変化過程モデルを設定しうる（酒井一九八二B）。

「遺跡」としての拠点集落

中期社会の基本構成要素たる拠点集落の多くは前期以来同じ地に数百年間固定存続した結果、「遺跡」として次のような一般的様相を備えるものが多い。



第一図 拠点集落の理論的枠組 (酒井1982)

一、遺跡範囲の中核には第一様式+第二~四様式の基本生活維持施設(住居・貯蔵・火所・廃棄物処理)にかかわる遺構群の著じるしい累積をみる。

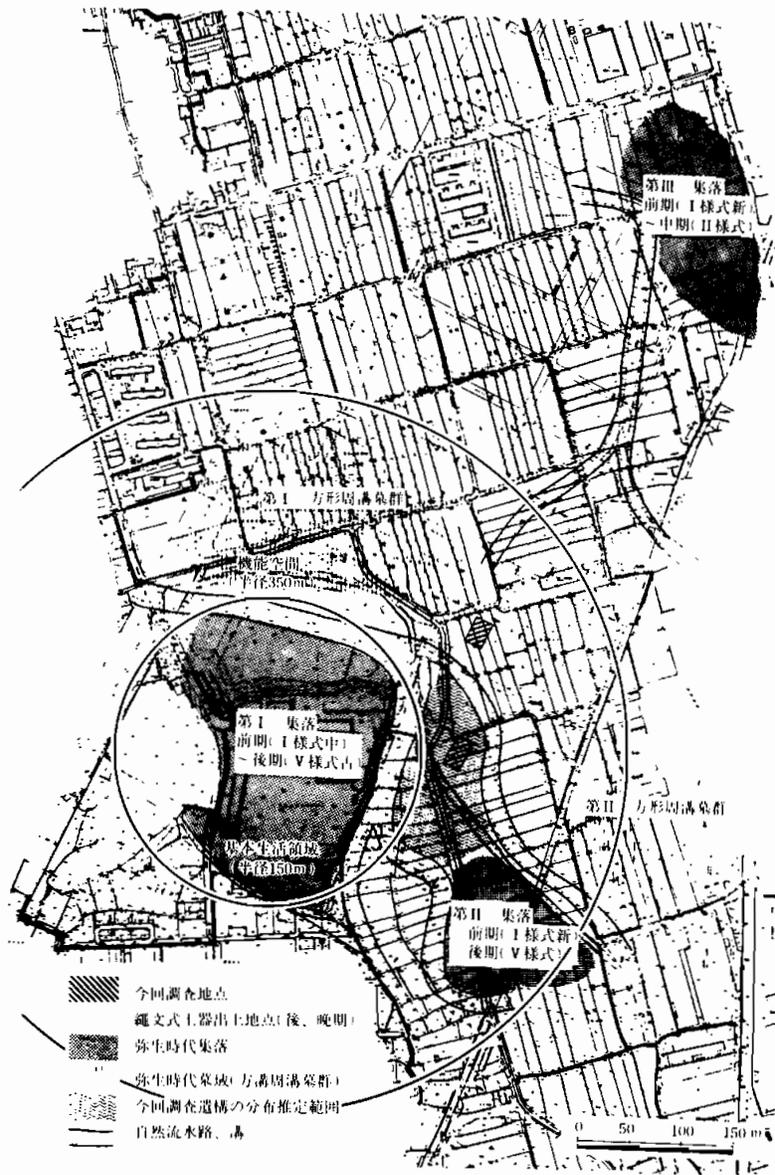
二、この基本生活領域の範囲は径三百メートル程度である。
三、基本生活領域と重複し、より広範囲には中期各時期の各種機能活動施設(水田・水路・墳墓・祭祀場・製作場・その他)にかかわる遺構が分布する。

四、この機能空間の範囲は径七百メートル程度である。

この一般的様相は、遺跡範囲と存続時期から拠点集落の可能性ある遺跡を特定すべく典型的な拠点集落たる池上・瓜生堂・亀井の三遺跡の知られる実情から導きだした(酒井一九八二A)。ここで、別の実例として四ツ池遺跡をあげその妥当性を簡略に検討しておく(第二図)。

四ツ池遺跡(堺市教育委員会一九八一)では、三光台地と称される台地上に弥生時代前期中頃(第一様式中段階)~後期(第五様式)初頭の住居址等生活諸遺構が集中する。ここを基本生活領域と理解してよいだろう。この範囲は長径三百メートル、短径百八十メートル程度で、周囲を段丘壁・自然流路・溝で画される。視覚的にも基本生活領域を画していたことになる。台地の北方と東方の二ヶ所には方型周溝墓を主体とする墓域が発見されており、基本生活領域を核にその周囲が機能空間として用いられていた事実を知りうる。これら二ヶ所の墓域の外縁は台地中央、すなわち基本生活領域の中心から三百五十メートル付近にいずれも位置する。こうした状況は、四ツ池遺跡の基本生活領域と機能空間の規模が先にあげた拠点集落の一般的様相とおおむね一致することを示す。

基本生活領域と機能空間とも理論的には円形に描くけれども、実際の遺跡範囲は現実の地形に制約されて変化が生じていよう。例えば、背面に北摂山地、正面に淀川流域が存し、それらに挟まれた地に存する安満遺跡は南北〇・三キロメートル、東西一・二キロメートル程度の



第二図 四ツ池遺跡の基本生活領域と機能空間
(堺市教育委員会1981) に加筆

極長形を呈する。このような変形が生じている場合でも全体の面積は先の一般的様相と大差はないであろう。ちなみに大和盆地の典型的な拠点集落たる唐古遺跡(田原本町教育委員会一九八三)は短径六百メートル、長径六百五十メートル程度の範囲が推定されている。

拠点集落のキャッチメントエリア

内在する各拠点集落とその周囲自然環境とで一個のエコシステムを形成する。各集落は、自らの環境体の諸資源にかかる生産活動と他環境体の諸資源にかかる消費活動とで社会的に機能することになる。

生活集団と周囲自然環境との関係についての理解には Vial-Funzi・Higgs (1970) の分析概念を援用し、半径五キロメートルの円形距離範囲もしくは徒歩一時間の時間範囲をその集落のキャッチメントエリア catchment area とみる。自然環境は各種の微小環境 microenvironment (Coe・Flannery 1964) 群で構成され、各キャッチメントエリア内の微小環境の内容は各エコシステムを個性づけると共に、各拠点集落の生産・消費活動を規定する。

近畿地方中央部の各地に広範囲かつ大量の移動が知られている産物のいくつかを観察すると、例えば国府・喜志・竹内遺跡には打製石器用サヌカイトを産出する二上山地域が、瓜生堂・鬼虎川・恩智遺跡には良質な土器用粘土の生駒山脈西麓が、池上・四ッ池遺跡には海産物の大阪湾が、太田黒田遺跡には磨製石器用結晶片岩の紀ノ川流域が、あるいは安満遺跡には磨製石器用粘板岩の円波山地がそれぞれ近接所在し、各エコシステムを大きく個性づけている。また逆に、河内平野や大和盆地中央部に位置する諸遺跡は石器石材のほとんどを他集落

のキャッチメントエリアもしくは遠隔地から搬入せざるをえない条件が課せられる。

拠点集落遺跡の分布型態

近畿地方全体（三重県・滋賀県・京都府・奈良県・大阪府・和歌山県・兵庫県）には二千ヶ所程度の主な弥生遺跡が知られている（竹内他一九八二）。これらには大・小様々な規模、長・短様々な存続期間、集落址や銅鐸の出土地等様々な種類、あるいは集落址でも拠点集落や派生周辺集落等様々な性格の遺跡すべてが含まれる。その中から各地の拠点集落を特定するには適切なフィルトレーション filtration (Groube 1981, 酒井一九八三) を施す必要がある。ところが厳密かつ客観的フィルトレーションをしうる程すべての遺跡に調査がおよんでいるわけではないし、また遺跡としての拠点集落の定義が十分されているわけではない。そこで中間作業としての本稿では暫定的にその一般的様相を設定し、それにほぼ該当する遺跡と可能性の検討を要しよう遺跡とで一応の分布図（第三図）を作製した。そこにあげた遺跡の多くは筆者の主観で選定しているが、必要に応じて先学（寺沢一九七九、佐原他一九八三）の考えをも参考とした。将来における調査の進捗に応じたより合理的な分布図を再製してゆくことを条件に、これから近畿地方中央部における拠点集落の分布状況Ⅱ数・範囲・配

列・間隔等を概観したい。

さて可能性を認めた遺跡と検討を要する遺跡は次の五十三ヶ所である。

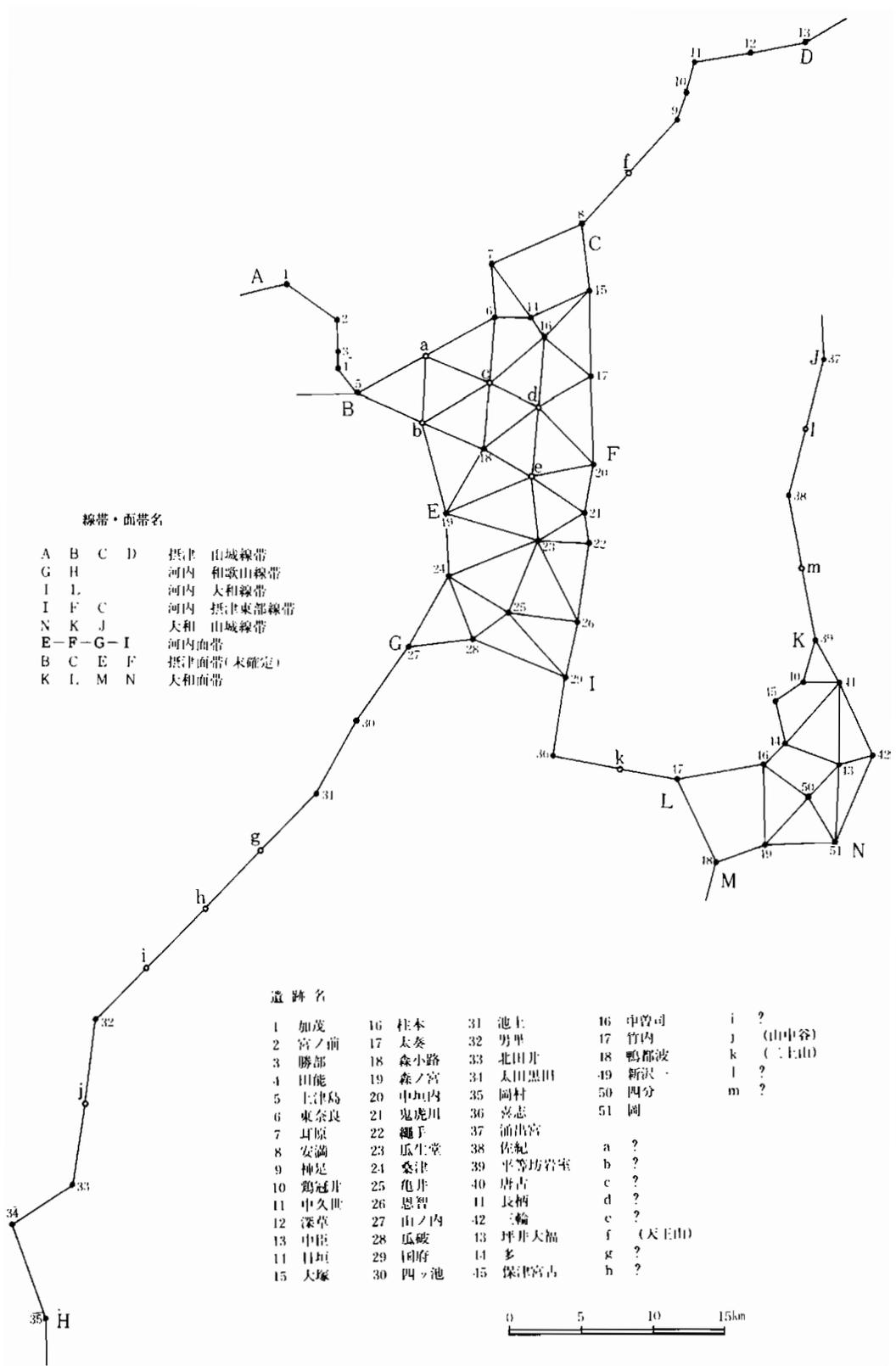
加茂、宮ノ前、勝部、田能、上津島、東奈良、耳原、安満、神足、
鶏冠井、中久世、深草、中臣、南滋賀、服部、目垣、大塚、柱本、
大奏、森小路、森ノ宮、中垣内、鬼虎川、繩手、瓜生堂、桑津、
亀井、恩智、山ノ内、瓜破、国府、四ッ池、池上、男里、北田井、
太田黒田、岡村、喜志、涌出宮、佐紀、平等坊岩室、唐古、長柄、
三輪、坪井大福、多、保津宮古、中曾司、竹内、鴨都波、新沢一、
四分、岡。

この中で発掘が比較的進行していてその可能性の高い遺跡に、田能、東奈良、安満、鬼虎川、瓜生堂、亀井、四ッ池、池上、唐古等があり、各地の拠点集落の実態を呈示している。いずれも先にあげた一般の様相におおむね合致しよう。

分布の北西端には加茂、北東端には服部、南西端には岡村、そして南東端には岡遺跡がそれぞれ位置する。分布地は摂津平野、河内平野、山城盆地、琵琶湖南端沿岸、大和盆地、和泉平野、和歌山平野等におよび、とりわけ集中するのは摂津平野東部、河内平野北半と大和盆地南半の二ヶ所である。このことは拠点集落がいわゆる畿内中央部を核として分布していることを明確に示す。

配列を見れば、各遺跡が空間的に広がりをもって分布する部分（面

帯）と列をなして分布する部分（線帯）の二者がある。もちろん前者は後者の複合と理解できる。典型的に面構成をして遺跡分布をみる地は河内平野北半（河内面帯）と大和盆地南半（大和面帯）の二ヶ所である。河内面帯を構成する遺跡には森ノ宮、中垣内、鬼虎川、繩手、瓜生堂、桑津、亀井、恩智、山ノ内、瓜破、国府遺跡が、大和面帯の遺跡には平等坊岩室、唐古、長柄、三輪、坪井大福、多、保津宮古、中曾司、竹内、鴨都波、新沢一、四分、岡遺跡がある。これら典型的な二つの面帯に加えて摂津平野東半にも河内面帯と連続する遺跡分布（摂津面帯）もみられるとしても、現時点では未確認の遺跡も多く確定しない。河内面帯と大和面帯の諸遺跡は実際的には生駒―金剛山脈で画されるが、二上山の東西両側に位置する竹内と喜志の両遺跡が最も接近しておりその分布線（河内―大和線帯Ⅱ二上山線）でつながる。一方、線構成をして遺跡が分布する地は大和湾沿岸、生駒山脈西麓、淀川北岸、大和盆地東辺、木津川沿岸、等各所にある。河内面帯の南西端から大阪湾沿岸に沿って和歌山へのびる遺跡分布線（河内―和歌山線帯）には山ノ内、四ッ池、池上、男里、北田井、太田黒田、岡村遺跡が、摂津平野から淀川北岸に沿って山城盆地更には琵琶湖南端にも至る分布線（摂津―山城線帯）には加茂、宮ノ前、勝部、田能、上津島、東奈良、耳原、安満、神足、鶏冠井、中久世、深草、中臣、南磁質あるいは服部遺跡等がある。金剛山脈の北端近くの二上山西麓から生駒山脈西麓に沿って摂津平野東部に至る分布線（河内―摂津東部



第三図 弥生時代中期・拠点集落遺跡の分布および関係（試図）

線帯)には喜志、国府、恩智、縄手、鬼虎川、中垣内、太奏、大塚、安満遺跡が、大和盆地東辺から木津川に沿って山城盆地にむかう分布線(大和―山城線帯)には例えば岡、坪井大福、長柄、平等坊岩室、佐紀、涌出宮遺跡がのる。ただし後者についてはなおまだ摂津―山城線帯と結合するにはいたらない。こうしてみると、近畿地方中央部における拠点集落の配列状況は二つの面帯(河内面帯・大和面帯)とそれらを結ぶ線帯(河内―大和線帯)ならびにそれらから派生する複数の線帯(河内―和歌山線帯、摂津―山城線帯、河内―摂津東部線帯、大和―山城線帯、他)にかかる遺跡からなっていると理解できる。

次に隣在する遺跡との間隔を観察する。

第三図は各遺跡の範囲が不明瞭であること、集落址の中心が発掘により確定していないこと、分布図上の厳密な位置にドットを打ちきれしていないこと、更には拠点集落遺跡として今回とりあげたものを実際には該当しないものが含まれているだろうこと等、諸条件と不手際が重なり相当の誤差が想定されるけれども、現時点でその一般的様相をうかがう程度には有効であろう。

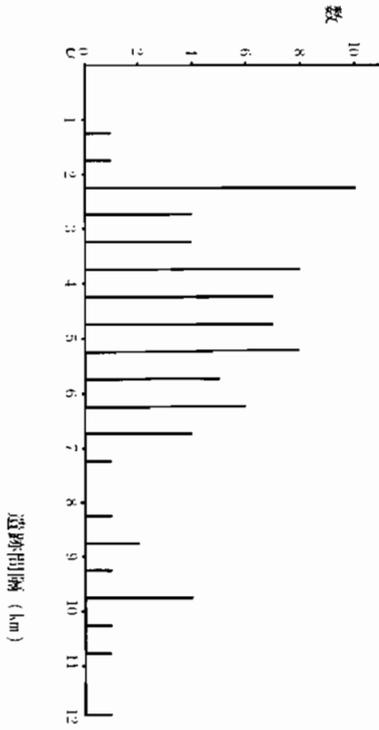
地図上の遺跡間隔は先に述べた諸事情に加えて、現実の地形を全く無視した平面的直線距離で、細やかな測定数値はあまり意味を持たない。この限定を踏えつつ概観すると次のような結果をえる(第一表)。

七七ヶ所について間隔を測定すると三つの数値付近に分布頻度が高い。すなわち二・一―二・五キロメートル(十ヶ所)、三・六―六・

五キロメートル(三十九ヶ所)、そして九・六―十・〇キロメートル(四ヶ所)である。そこで理解しやすいように数値を限定して言い代えると、それぞれ二・五キロメートル、三・五―六・五キロメートル、そして十キロメートル付近に頻度の山があるということになる。この内、多数を占めるのは三・五―六・五キロメートルで、仮にその中間値をとって五キロメートル程度が拠点集落の一般の間隔と仮定しておこう。

仮に五キロメートル程度毎に拠点集落が点在するのを一般的とする立場をとれば、理論的にあるべきポイント付近に遺跡が実在するのは当然としても、実在しないポイントはブラックホール Black Hole (Groube 1981)として検討を要する。分布図におけるブラックホールの原因は様々(Hodder 1976, Groube 1981)で、例えば①もとからない、②あるがまだ発見されていない、③あったが既に消滅した、④遺跡はあるが当該分布図にあげていない、等が考えられる。そこで具体的にブラックホールを特定して検討する。仮に一ヶ所のブラックホールが想定される場合、その両側に位置する遺跡間隔は五キロメートルの倍数で十キロメートル程度のはずであろう。先ず大和―河内線帯上の竹内―喜志遺跡間の直線距離は九キロメートルで、その中間に一ヶ所の拠点集落が存してもよい。ところが中間にはサヌカイト産出で著名な二上山がある。拠点集落の立地条件は一般的に平地もしくは低い丘陵上であることから、当該地がその設定条件に著るしく

あわないことはただちに指摘しうる。本来は竹内―(二上山)―喜志遺跡となるべきを、中間に山脈がある為当初から拠点集落がその地に設定されなかった可能性が強い。同様に線帯上の遺跡で間隔が十キロメートル程度そして中間に山塊がある個所を探すと、河内―和歌山線帯上の男里―北田井遺跡間や摂津―山城線帯上の安満―神足遺跡間がみいだせる。後者は九・九キロメートルで中間に天王山(大山崎)が、前者は十一・八キロメートルで中間に和泉山脈(山中谷)が存し、それぞれ中間に一個の集落が予想されながら条件に合わない理由で当初から設定されなかったと判断できる個所である。これらに対し、河内―和歌山線帯上の池上―男里遺跡間は二十二キロメートルを測り、中間に三個の拠点集落が予測されるブラックホールとなっている。ところ



第1表 遺跡間隔頻度表

がこの中間地には山脈もなく設定条件にかなった平地で、かつ実際にも多数の弥生遺跡の存在が知られている。現時点では拠点集落の可能性を考慮しうる遺跡をそれらの中からまだ特定できていない実状にある。このようなブラックホールの地が設定条件にありかつ当該時代の遺跡が数多く分布していれば、その内のある遺跡が将来の調査で特定されることになる。また大和―山城線帯の平等坊岩室―佐紀遺跡間(十・三キロメートル)と佐紀―涌出宮遺跡間(九・七キロメートル)で、いずれも中間に一個の遺跡が予測されるブラックホールである。前者については窪之庄遺跡が該当しよう可能性(寺沢一九七九)も考慮され、後者については木津川南岸付近に新たな遺跡の発見が望まれる。次に面帯でのブラックホールを考えてみよう。河内平野北半―摂津平野東部の中間地には旧河内潟の存在が指摘され(梶山・市原一九七二)、そこは典型的なブラックホール地帯を呈している。先に述べたように中間に一個の存在が予測される場合その両側の遺跡間隔は十キロメートル程度と想定したが、ここでも実際に上津島―東奈良遺跡間(十一・〇キロメートル)、東奈良―森小路遺跡間(九・二キロメートル)、森小路―太奏遺跡間(九・〇キロメートル)、森小路―上津島遺跡間(九・六キロメートル)といずれもその数値に近接する。この内、森小路―太奏遺跡の中間点には古川遺跡(瀬川一九八三)が、東奈良―上津島遺跡間には垂水遺跡が、森小路―鬼虎川遺跡間には諸福遺跡等がそれぞれ知られており、拠点集落に確定されえなないとして

も今後の検討を必要としよう。また森小路―上津島遺跡間と森小路―東奈良遺跡間には遺跡の存在が知られず、また当該地がいずれも現在の新淀川が位置している。上流の柱本・大塚の二遺跡が淀川河川敷内に存する実例であることを考慮し今後の観察に努めたい。以上の諸点を考え合わせて、面帯・線帯上における十キロメートル程度の遺跡間隔の中間付近には一個のブラックホールを設定し理解することも妥当であろう。とすると、先にあげた五キロメートル程度という一般の間隔の妥当性をも間接的に傍証することになる。

続いて別の高い頻度にある二・五キロメートル前後という数値をとりあげる。これは、多くの遺跡間隔が五キロメートルを相前後するという一般的な様相の二分の程度にあたる。このことは一般的間隔の中間付近にも時として集落が設定されたことを示している。こうした個所は摂津―山城線帯上の神足―鶏冠井―中久世遺跡をはじめとして所々にみられるけれども、将来における調査の進展とフィルトレーションにより近接諸遺跡の中から真の拠点集落が特定できると予想している。

拠点集落群の結合型態

遺跡の分布状況から近畿地方中央部には、五十ヶ所程度の拠点集落が、五キロメートル程度の標準間隔で、二つの面的+多くの線的配置

をすることにより、一つの空間的枠組を構成していた概要が把握できた。この基本的な枠組に、各拠点集落から派生した各期の下位諸遺跡の消長を重ね合わせれば実態的な構成を浮かびあがらせることが可能と思われる。

さてここでは集落群の結合型態を決定すべく以下の二項目について検討する。

既に述べたように、各拠点集落を核とする半径五キロメートル（もしくは徒歩一時間距離）は内在集落のキャッチメントエリアである。集落aは半径五キロメートルの周囲環境体と相互関係をもってエコシステムAをつくる。隣在集落bも当然個有のエコシステムBをつくる。ところが両者の標準間隔は五キロメートルだから、集落aのキャッチメントエリアの丁度外縁に集落bが位置することになる。これは集落bからみても同様なので両者は相互関係にあるとともに、別の集落cとも同様の関係となる。キャッチメントエリアは日常生活の中に容易に組み込むことのできる往復距離（水津一九六八）にかかわると考え、それぞれが日常的に往来可能な相互関係を結んでいると判断できる。こうした考えに基づけば、近畿地方中央部には五十程度の拠点集落が五キロメートルの間隔で連続して配列しているので、全体を日常的往来可能な範囲の集合体と理解することが可能となる。なお隣在する集落との間のキャッチメントエリアの相当部分は両者のものが重複するので、理論的には丁度その中間点、二・五キロメートルの範囲迄を自己の観

念的領域と意識しうるであろう。

次にヒエラルキーの問題がある。厳密にはレベル差を確認できる程全遺跡の調査が進んでいない実情とは言え、今回とりあげた約五十遺跡にその規模・構造・機能等について基本的隔差は見いだしたがたい。これら拠点集落の一般の様相を大きく越えるより上位レベルの中、心地 neutral place にかかる遺跡は存しなかったと推定している。各種生産物の観察結果も、特定遺跡に集中することなく各地に均一に移動していたことを示しており（酒井一九七四、一九八一）、その判断を傍証している。

これらの諸点を総合すると、この地の集落群の結合型態は、少数の上位集落と多数の低位集落からなる典型的なピラミッド型ではなく、同レベルの多くの拠点集落が均一に連鎖する網目型であり、各集落のつくりだす日常活動空間の連続的な集合体を構成していたことが理解されうる。

集落配列にみる生産物の移動経路

各種生産物の内、例として移動頻度の高いサヌカイト・結晶片岩・粘板岩・河内産土器をとりあげ、それぞれの産出地と集落配列によりながら移動ルート推定する。

打製石器用サヌカイトは畿内中央部の二上山・春日山・明神山とそ

の周辺地域に産出し、畿内各地の遺跡で出土する。二上山地域に近接しそこをキャッチメントエリアに組みこめるのは、河内側には喜志・国府の両遺跡が、対する大和側には竹内遺跡がある。いずれも大量のサヌカイト石片を出土させており、これらの遺跡を経由して各地に移動した可能性は強い。喜志・国府遺跡からは北方へは河内―摂津東部線が、北西方向へは河内―摂津西部線が、大阪湾沿岸南方向へは河内―和歌山線が、それぞれのびておりそれらに沿って移動したと考えられる。対する竹内遺跡の東側にはすぐさま大和面帯の諸遺跡が集中し、これらを経て北方の木津方面にも移動したであろう。

畿内南辺の紀ノ川流域には石廂丁等磨製石器用の結晶片岩が産出し、この製品や半成品は和泉平野・河内平野・大和盆地・摂津西部の諸遺跡に分布する。河口の和歌山には太田黒田と北田井遺跡が所在するが、これらの諸遺跡内で大量の結晶片岩を加工・搬出した痕跡が確認されているわけではない。しかし位置から判断して河内―和歌山線を北上し、和泉平野や河内平野の諸遺跡へ、更には摂津西部には河内―摂津西部線を経て移動したことになる。紀ノ川中流域にはまた少し離れて鴨都波遺跡が所在する。この地は大和盆地への入口に位置し、この遺跡を経て大和盆地へ北上したであろう。

同じく石廂丁等磨製石器用の粘板岩は畿内北辺の丹波山地に産し、その製品は摂津平野・河内平野・山城盆地・琵琶湖沿岸・大和盆地に分布し、一部は和泉平野にも及ぶ。限定した産出地は特定しえていな

いが、多くの粘板岩製石庖丁未成品を出土さす遺跡に安満（原口一九七七）がある。移動経路には摂津西部―山城線、河内―摂津東部線が移用されただろう。大和盆地へは木津川を南下した可能性が考えられるとしても、盆地に入る迄には拠点集落による線帯構成は認められない。

特有の胎土と製作技法で著名ないわゆる河内の土器は、生駒山脈を形成する岩脈の風化バイラン土壌を含む粘土を素材とする。河内平野に所在の諸遺跡はそのキャッチメントエリアに土壌産出地を含み、鬼虎川・瓜生堂・恩智遺跡にその製作の可能性を求めておく。この地にあっても亀井遺跡には典型的な土器の出土する率は多くない。河内産土器は畿内各地の遺跡に分布し、先のサヌカイトと同様の経路を使って移動したと考えられる。

ところで生産物の移動はすべて人間の手を介在しているし、生産物の移動や人間の移動はまた各種情報の移動をもたらす（上野一九八〇）。現在の認識では諸生産物のいくつかについての移動は特定できなくても人間の移動の実態についてはまだ理解が及ばない。Rentfrew (1975) によれば生産物の移動様式には次の十種があり、それぞれ生産物の移動状態から推定が可能という。

① direct access, ② reciprocity (home base), ③ reciprocity (boundary) ④ down - the - line, ⑤ central place redistribution, ⑥ central market - exchange, ⑦ freelance (middleman) trading, ⑧ emissary trading, ⑨ colo-

nial enclave ⑩ port of trade。今後その理解に努めたい。

中期社会のセトルメントシステム

以上の諸点を整理すると、近畿地方中部に存した中期社会構成体のセトルメントシステムは次のようなものであった。

1. 社会の基本構成要素は拠点集落で、知られる数は五十ヶ所程度であった。
2. その多くは前期（第一様式）に設定され、中期初頭（第二様式）～中期末（第四様式）の長時間にわたり個定存続した。
3. 後期（第五様式）初頭に廃絶を始め、後期末にはすべてが廃絶した。
4. 拠点集落を核とする半径五キロメートル（もしくは徒歩一時間範囲）をそのキャッチメントエリアとみる。
5. 拠点集落は五キロメートルの標準間隔を置き、連続分布して面的・線的配列していた。全体としては、二つの面帯とそれを結ぶ線帯および多くの派生する線帯から構成される。
6. 先にあげたキャッチメントエリアの範囲と標準間隔からみて、全体が日常往来範囲の連続集合体であった。
7. それらの結合形態は、小数上位集落と多数下位集落によるピラミット型ではなく、多数の同位集落群による網目型であった。

8. 諸生産物は産出地に所在する拠点集落を介在して、多くの集落配列を回路として各地に移動した。

9. ただし、生産物と情報の移動をもたらす人間の移動については理解が及ばなかった。

中期社会の構造維持過程

中期構成体は以上のセトルメントシステムに枠組されて、数百年の長時間にわたり基本的な構造生成をすることなく、構造維持としたことに特質が認められる。ついでには次のようなネガティブフィードバックの作用によりその構造維持過程を説明できる。

I 各拠点集落は半径五キロメートル（もしくは徒歩一時間範囲）のキャッチメントエリア内の微小環境と相互関係して自らのエコシステムを形成する。

II 前程条件として、畿内各地に特徴ある微小環境が偏在分布しており、単一のエコシステムだけでは自立できない。例えば、各平野中央部では石器用石材が全く産出せず、すべて遠くの諸産地から搬入せざるをえない。

III 各産出地に各種の産物を採集しに行く可能性もあろうが、前程条件からしてそれについてやすエネルギーがあまりに大きい。かつ各産出地所在の集落の干渉をも受ける。それゆえ自己の個性あるエコシ

ステムを背景に、他諸集落との交換活動をする方がはるかに合理的である。

IV 結果として、生産物の交換に適した集落配置を指向し、交換活動が実施される。

V ひとたび交換ネットワークが形成され、各集落が機能し始めるとその流通システムを疎外する動きは相対的圧力となり自らにはねかえる。ここに全集落が等質で、基本的な隔差が生じにくい構造となる。

VI 各地の拠点集落の関係には、活発で多方向の諸生産物の交換活動にもとづくネガティブフィードバックが作用し、全体の構造を維持する力となる。

VII 構造維持は何等かの決定的な外圧による内部障害が発生するまで持続する。実際に継続的な外圧が生じていたらしく、これに対応して銅鐸を特定祭器とする祭祀イデオロギーが徐々に強加（ポジティブフィバックがこの部分に作用）された。

VIII 構造が解体し始めるのは後期初頭で、終了するのは後期末である。

おわりに

以上、先学諸氏の御批判を願うべく極めて簡略化して論じた。限られた調査しか受けていない遺跡を観察対象として過去を再構成する作業そのものには、当然のことながら限界がある。御批判と調査の進捗

を受けて今後とも再構成に努めたい。

なお、「拠点集落」にかかわる最近の諸論議は田中義昭（一九七六）による論文を出発点としている。ただし、本稿における「拠点集落」の用語は田中によるそれと必ずしも一致するわけではない。参照されたい。

〔付記〕

原口正三・堅田直・佐原貞の諸先生には本稿校正中に有効な御提言いただいた。今回はそれらを生かしえなかったが将来における作業には役立てたい。文末ではあるがお礼申しあげます。

〔文献〕

上野佳也一九八〇「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』四十四巻四号

大阪文化財センター一九七七「大阪文化財地図」

梶山彦太郎・市原実一九七二「大阪平野の発達史」『地質学論集』七号

クンケル一九七四『行動社会学と経済発展』（加藤昭二訳）

国土地理協会一九七五『全国遺跡地図（京都府）』26

堺市教育委員会一九八一「四ツ池遺跡―第八十地区・第八十一地区―」

酒井龍一九七四「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』二十一巻二号

一九七六「弥生社会の体系的理解に関する認識論」『大阪文化誌』二巻一号

一九七七「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』二十四巻二号

一九七八A「弥生中期社会の形成」『歴史公論』四巻三号

一九七八B「銅鐸・その内なる世界」『摂河泉文化資料』三巻二号

一九八〇「銅鐸（邪気と封じこめのオブジェ）論」『摂河泉文化資料』五巻三号

一九八一「亀井遺跡の石器生産」『亀井・城山』（大阪文化財センター）

- 一九八二A「畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』（大阪文化財センター）
- 一九八二B「古代国家の形成プロセス」『奈良大学紀要』十二号
- 一九八三「Settlement archaeology: その考え方と手法」『文化財学報』二集（奈良大学）
- 佐原真他一九八三「弥生時代各期主要遺跡の分布—近畿要部—」『日本歴史地図原始・古代編上』
- 瀬川芳則一九八三「淀川左岸低地の集落遺跡」『ヒストリア』百号
- 竹内理三他編一九八三『考古遺跡・遺物地名表（原始・古代）』
- 田中義昭一九七六「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』八十七号
- 田原本町教育委員会一九八三『唐古・鍵遺跡（第十三・十四・十五次発掘調査概報）』
- 寺沢 薫一九七九「大和弥生社会の展開とその特質」『橿原考古学研究所論集』四号
- 奈良県教育委員会一九七三『奈良県遺跡地図』第一分冊
- 一九七一『（同）』第二分冊
- 一九七二『（同）』第三分冊
- バックレイ一九八〇『一般社会システム論』（新睦人・中野秀一郎訳）
- 原口正三一九七七「安満遺跡」『高槻市史（本編）』一卷
- 春成秀爾一九七八「銅鐸の埋納と分布の意味」『歴史公論』四巻二号
- 水津一郎一九六八「地域における結節システム—その社会地理学的検討」『人文地理』二十巻五号
- Coe, M. D., Flannery, K. V. 1964 Microenvironment and Mesoamerican prehistory. *Science* 143
- Groube, L. 1981 Black holes in British prehistory: the analysis of settlement distributions. *Pattern of the Past.*
- Hodder, I. R., Orton, C. 1976 Spatial Analysis in Archaeology
- Maruyama, M. 1963 The second cybernetics: deviation amplifying mutual causal processes. *American Scientist* 51
- Renfrew, C. 1975 Trade as action at a distance: questions of integration and communication. *Ancient Civilization and Trade.*
- Vita - Finzi, C., Higgs, E. S. 1970 Prehistoric economy in the Mount Carmel area of Palestine: site catchment analysis. *Proceeding of the Prehistoric Society.* 36